ろくおん通信

9月号

第19号 1989.9.10発行

盲人情報文化センター
録音製作係

コンピュータと音声訳

視覚障害の世界にもコンピュータの導入が行なわれ、現在コンピュータを活用した点訳、データの音声出力などが行なわれています。

時代の波なのでしょうか、ＩＣＣＢでもＩＢＭの「てんやく広場」、当法人の「リンテル６(視覚障害情報システム)」、近点協事務局の「ＮＬＢ(近畿点字図書館研究協議会点字・録音図書目録)」（ＩＣＣＢが事務局）など、コンピュータを使って初めて出来る新しい事業がここ数年の間に増えています。

録音関係では、スタジオ、編集などの機器自体は信頼できる機種の導入が出来ましたが、製作方法そのものは、ここ数年の間でほとんど変化がないと言っても過言ではありません。

最近、東京にある言語工学研究所より「がってんだあ」という自動点訳のソフトウェアが開発されました。これは、ワープロなどで作成された（データ化された）文章を自動的に点字に変換するソフトで、ワープロで一度に変換できる程度のものであれば、ごく一部の修正で点字化することができるもので、ちょっとした読書には十分実用性のあるものです。“仮名にできるものは音声でも出来る。”ということは同社の音声出力ソフト「談話」でも実証されています。

手作業で作成されていた点字図書・録音図書がコンピュータを介して作られる。かつては夢であったことが、現実となりつつあります。

こうしたコンピュータで作成された図書と現在音訳している図書との関係はどうなるのでしょうか。

コンピュータ処理といえども現在のコンピュータでは図形の音声化処理を行なうことは出来ません。にも関わらず現在の墨字図書（原本）の状況を見ると、視覚的伝達手段を用いた図書づくりが多いのが現状です。このことは、今後とも人手に頼った図書作りがどうしても必要となるということです。

必要に応じて説明を加えたり、場合によっては逆に説明を簡略化する。これらは、すべて人の判断を経て処理されるもので、まだまだ機械化にはほど遠い部分であるともいえます。こんなことを考えながら、今後の録音製作のあり方をなどを考えているこの頃です。

さて、紙面をお借りしてお伝えしておかなければならないことがあります。７Ｆ職員紅一点の川端（旧姓　谷垣）が職場を離れることになりました。係としては非常に痛手で、今後どの様に業務をすすめてゆけばよいのか苦慮しているところです。

仮に欠員が補充されても、すぐに現行通りの業務を継続することは無理でしょう。

係としては今後のことも考え、この際製作体制を変更せねばと考えています。詳細は内部での検討を経て、皆様にお伝えし、協力をお願いすることになります。

(むらい)

専門別音訳研究会　「英語」第二回　メモ

1989．8．4

7月7日の第一回の集まりで皆さんから出されたご意見、ご質問などを簡単にまとめてお配りしたところ、第二回目には、前回とはまた違ったメンバーの方々が、一層たくさんお集り下さいました。今回は、利用者の立場からのご意見も伺うために、大学で英文学を専攻していらっしゃる方にもおいで頂きました。館側からは館長代理の平野氏、利用者の立場も兼ねて森氏、担当職員の清水氏の三名、ボランティア側では、英語蔵書の録音に長いキャリアをお持ちの方や、永年中学校で英語教育にたずさわって来られた方も新しくご参加いただき、それぞれの意見交換にいっそうの広がりと厚みが出てきたことは、大変嬉しく、頼もしいことに感じました。

前回あがった幾つかの問題点に沿いながら、新たに出されたご意見も含めて、要点を以下にまとめました。

1）英語以外の外国語のスペリングの読みについて。

ロシア語、ギリシャ語などは別として、録音図書凡例や、適当な個所に音声訳者註で「スペリングは原則として英語読みします」といれて、英語読みをする。ただし、フランス語やドイツ語のアクセント記号（アクサン・テギュ、アクサン・グラーヴ、ウムラウトなど）は、そのまま読む。

なお、テープを聞きながら、点字を打つことが分かっている場合に、幾つかの問題が指摘された。　例：ü をユー・ウムラウトとするか、ウムラウト・ユーとするか。点字を打つために便利な読み方が依頼者などから要望されている場合には、この他にも適当な処理を考えるべき事例がありそうに思われる。ただ、蔵書などでは、本来のその言語としての正確な読みが望ましいのではないか。

2）大文字、小文字について。

人名、地名などは原則として大文字で始まることは自明のことなので、大文字、小文字の区別はいわない。　例：John, New York, the Nile, etc.　また、「大文字」とことわらない場合は、小文字であることとし、NORTH DAKOTA　などの場合は、はじめに、「全部、大文字」といれる。ただし、MacArthur, MacDonald, Simone de Beauvoir,　などについては、注意。

3）スペリングの読みについて。

これについては、議論が沸騰した。

a）スピードについて。

b）英語として正確な発音でありさえすればいいのか、日本語的な発音で、不都合はないか。

c）一語で長い綴りの読みは、どこで切るか。シラブルの切れめ、また、五字くらいをめどに、という意見もでた。

d）センテンスやフレーズのなかで、部分的にスペリングをいれる場合、どこで入れるのが適当か。　例：His son, Leigh, is a graduate of Yale. Leigh と Yale のスペリングを入れたい場合。

共通の確認事項としては、前置詞、冠詞のほか、ごく平易な単語については、スペリングはいわない。略語については、（株）を「カブ」とは読まないように、それぞれの言葉について適切な読みを、調べ、選択する以外にない。いずれにしても、原本の性格、予想される利用者の知識のレベルに応じた的確な処理が要求される。

対面朗読で英語の発音記号の説明をどうすればよいかという、質問があった。これについては、適当な解決方法がありそうに思われる。次回の議題の一つにしたい。

４）日本語の原本の中に出てくる外国語を読む場合、リズムが崩れて不自然になることについて。これについても、次回にもうすこし煮つめてみたい。

５）英語として正確な発音と、日本語的な発音の英語、そして、その中間に位置する、もっとも利用者にとって問題になる読みについて。音声訳者側にとっても、実はこれが一番悩ましいところで、今後の議論のポイントになると思われる。

実は、専門別音訳研究会の英語分野については、当初の予定では、第二回の今回をもって終わるはずでしたが、参加者の中から、「やっと、面白くなってきたところなのに」という声があがりました。館長代理の方からも、今後英語をはじめとして、外国語の適切な処理がますます必要な状況になると思われるので、続けてはどうかというお勧めがありました。次回、９月２１日（木）（午前１０時から１２時まで）に「一般科学」の研究会を予定されていた久保洋子さんのご了解のうえ、さしあたり、もう一回「英語」についての集まりを持つことになりました。前二回の議論を叩き台にして、率直な意見交換をし、合意事項の幾つかでもまとめることが出来れば、と考えています。

（　古谷　穹子　）

ニューフェイス紹介

今年春からスタジオ録音をはじめた新人の方々をご紹介いたします。ご住所と録音の曜日、そして活動４カ月のご感想を伺いました。
どうぞよろしくお願いします。　（順不同）

・浜西美津子　（尼崎市）　火曜日
何と下手なんだろう。《何年やってもそう思っている人もたくさんいますよ》
人は皆上手に思えて、道は遠いという感じがしています。

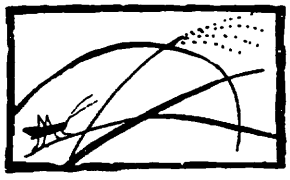
・伴　房子　（吹田市）　火曜日
調査は面白く、楽しみにやっていますが、人名・年号の読み方で苦労しています。読む度に声の調子スピードが変っているみたいで気にしています。

・中沢　康子　（川西市）　水曜日
肥後橋通いは講習の続きで生活のリズムになっています。やっと少し慣れて、訂正も出来るようになりましたが、はじめはテープに入っているのかどうか心配しました。

・中村美恵子　（枚方市）　水曜日
調査も、ただ間違わずに読むのも、やってみてはじめて大変さがわかりました。機械操作がとても気になりました。

・大西　祥子　（門真市）　水曜日
スタジオに入ったとたん、緊張で読める筈のものも読めなくなる状態です。初めての校正表にびっくりしました。機械にはほんの一寸慣れてきてやれやれ。

・有末　道子　（枚方市）　水曜日
目下　下調べに悪戦苦闘しています。講習中には予想もしなかったむずかしさに、呆然　自信喪失です。



しばらくお休みしていた『ろくおん通信』、皆様のご希望もあり再開の運びとなりました。スタッフ募集のポスターでご存知のように、ボランティアが中心になって発行することになっています。
編集・発行をお手伝いして下さる方を求めています。毎回でなくても皆で順番に少しずつ力を合わせて作っていければと願っています。次回の編集会議に是非おいで下さい。
ご意見・ご希望をお寄せいただくだけでも結構です。

日　時　　９月２６日（火）　２時

今回のスタッフ　工藤和子　古谷穹子　清水賢造
久保洋子　片岡珠子（ワープロ）